

欲望は理性に従うべし

高橋 秀

APPETITVS RATIONI OBEDIANT

立教大学の第一学生食堂の入口の上には、この横文字が掲げられている。これは、キケロの「義務論」第一巻の一〇二に出てくる言葉である。キケロはその著作のこの箇所です、どういうことを、言おうとしているのであろうか。またこの言葉は、どのようにして、ここに到来するようになったのであろうか。

一 キケロの義務論における欲望と理性

キケロの生涯と著作

キケロ（紀元前一〇六一—四三）は弁論家として世に出た。前七〇年ウェレス弾劾、前六六年東方に遠征するポンペイウス（前一〇六一—四八）の命令権を支持する演説などにお

史苑（第五六卷一—二号）

いて、政界の既成勢力に立ち向かう姿勢を示して注目を集めた。前六三年にコンスルになり、カティリナ弾劾の演説と処置によって国父と称えられた。国政の最高位を占めてキケロは諸身分の一致協力を唱えたが、彼の処置にカエサル（一〇〇—四四）はきびしく反発した。前五八年追放になり、五七年復帰したが、失意の中で著述に時を過ごすようになった。前四九年ポンペイウスとカエサルの内戦が始まり、キケロは調停を図るが不調に終わり、ポンペイウスの側に付く。内戦はカエサルが勝利し、前四七年キケロはカエサルから赦免される。カエサルは前四五年までにローマ世界の最高実力者の地位を築くが、前四四年殺される。キケロは共和政擁護の声をあげ、カエサルの後継者アントニウスを弾劾するいわゆるフィリップカ演説の熱弁をふるう。「義務論」はこの時期に書かれた。前四三年アントニウスとオクタウィアヌとの協力体制が成立し、その政情急

欲望は理性に従うべし (高橋)

変の中でキケロは殺されて果てる。

キケロの著作は、ラテン散文の最高の古典である。まず多くの演説がある。それから弁論についての考察があるが、この分野はわが国ではあまり取り上げられていない。これに対し哲学・倫理の著作は比較的取り上げられることが多い。「義務論」はこれに属する。さらに手紙が多く残っており、キケロと彼を取り巻く人々の心の中を窺い知る材料を提供する。古代史で人の心情を窺うことのできる史料としては、おそらく比類のないものであろう。

「義務論」

これはキケロの最後の著作である。当時アテネに留学していた息子マルクス(二一才)にあてて書かれた教訓の形をとっている。三巻から成り、第一巻は、徳の基礎としての高潔さについて、第二巻は、有利さについて、第三巻は高潔さと有利さとの関係について、論じている。¹⁾

本文

「義務論」において、欲望と理性は次のように論じられている。

〔一〕一、二〇一　そもそも心の力、また本性の力は、二通りある。一つは、欲望の中にあり、ギリシャ語でいうホ

ルメーであって、人をあちこちにけしかけける。もう一つは、理性の中にあり、何をなすべきか、また何を差し控えるべきかを、教えたり、説明したりする。したがって理性は上に立ち、欲望は下に付くことになる。

どんな行為にも、無分別や無頓着があってはならないし、もっともな理由をあげることのできないようなことは、いっさいおこなってはならない。これがおよそ義務の定義となるものである。

一〇二　さて欲望は理性に従うようにしなければならぬ。そして欲望は、理性の前に出たり、また、のろいからとか、臆病だからなどといって、理性を見限るようなことがあってはならないし、平静を保ち、心の動揺をいっさいこらわらないようにしなければならぬ。こうすることによって、安定や節度が十全に輝き出ることになる。というのは、欲望は、迷走が行き過ぎて、求めるにせよ避けるにせよ、はね上がりようになって、理性の制御を満足に受けられなくなれば、必ずや限度を踏み越えてしまうのである。すなわち、欲望は、服従を捨て去り、自然の法により理性の下に属しているのにその理性に従わないのである。欲望によって動揺をこうむるのは、心だけではなく体もまたそうである。怒った人、なにか情欲とか恐怖に心をかき乱された人、あるいは快樂にあまりにも心を奪われた人などは、

顔からだけで見分けがつく。こういう人たちはみな、顔つきも声も動作も姿勢も、異なった様子になる。

このほか「義務論」には、欲望と理性を論じた箇所が三つあり、次のように述べられている。

〔2〕一、一三二一、心の動きは二通りある。一つは思考、もう一つは欲望の動きである。思考は大概は真実の探求にたずさわり、欲望は人に行動を起こさせる。したがってわれわれは、できるだけ善いことのために思考を用い、欲望を理性に従わせるように、注意しなければならない。

〔3〕一、一四一 どんなことを行う場合にも、三つのことをわきままえないければならない。第一に、欲望は理性に従うようにすることであり、義務を果たす目的にかなうものとして、これにまさるものはない。第二に、われわれの行動おうとすることがどんな意義をもつかに留意すること、そして事態の必要に即して過不足なく配慮と努力が払われるようにすることである。第三に、自由人にふさわしい格好と尊厳に関わる事柄については、節度を保つように注意すべきことである。ところで最上のやりかたは、先に述べた通り、品格を保つこと、そして行き過ぎないことである。しかしこの三つのうち最も重要なのは、欲望は理性に従うということである。

〔4〕二、一八 さて徳はすべて、おもむきのことによ

て成り立つ。第一は理解であり、すなわち、それぞれの場合に何が真実か、何が何に適當か、何が帰結となるか、何からそれぞれが生ずるか、何がそれぞれの原因であるか、などの理解に関わる。第二は、心の動揺、ギリシャ人のいうパトスを抑制し、欲望、ギリシャ人のいうホルメーを理性に従うものとすることである。第三は、われわれと一緒にいる人々と節度と見識をもって付き合うことである。われわれは彼らの好意によって、自然から必要とされたものを十二分に得ることになる。そしてまた、もしもなにかわれわれに不都合なことが生じたら、われわれはこの人たちによって、それをしのぎ、われわれに害を加えようと企てた者たちに報復し、公平と人間性の許す範囲の処分をほどこすことになろう。

以上四つの引用文の中の傍線部について、原文を示しておきたい。

〔1〕 I 101 Ita fit ut ratio praesit, appetitus obtemperet.

102 Efficendum autem est ut appetitum rationi oboediant.

〔2〕 132 Curandum est igitur utappetitum rationi oboedientem praebearnus.

欲望は理性に従うべし (高橋)

[c] 141 primum ut appetitus rationi pareat.....

Horum tamen trium praestantissimum
est appetitum obtemperare rationi.

[4] II 18 appetitiones quas illi hormas (nominant),
obedientes efficere rationi.

用語としては、[1]と[2]と[4]では、「欲望」と「理性」のほか「従う」という動詞も、同じ言葉が使われている。なお[4]では「欲望」には[1]と異なる形の語が使われている。

欲望と理性については、理解の参考に、英、仏、独、の訳語を次に掲げる。

英語	impulse	reason
仏語	desirs	raison
独語	Trieb	Vernunft

本文の文意は明かである。要するに、「欲望」は本能的な衝動であり、人を行動に駆り立てる。欲望は人を動かす根源的な力を持つが、もし各人が欲望のままに行動するならば、自己主張がぶつかり、世の中は成り立たないであろう。欲望が「理性」に従うようにするのが、人間の義務である。こうして義務は、社会倫理の基本として説かれている。

「義務論」と政治状況

「義務論」はカエサル死後の政情不安の中で書かれた。キケロは、この著作の中でカエサル殺害を支持し、共和政の擁護を唱えている。

まず、カエサルの名が出てくる箇所は三つあり(一、二六、四三三、一一二)、いずれも名指しの攻撃である。一例をあげよう。

「人は大抵、権力や名誉や名声への欲求に陥ると、それに引きずられて、正義を忘れてしまうようになる。エンニウスは、王権には、神聖な友好も、信義もありはしない、といったが、それは、あまねく通用する。すなわち、なにか多くの者が抜きん出た地位を占めるわけにはいかないような事態があった場合、いつも競争は激しくなり、神聖な友好を維持するのは、きわめて難しくなる。今やガイウス・カエサルの無分別がそのことを明白にした。彼は、誤った考えによって自分で自分のためにたくらんだ元首の地位のために、神と人のあらゆる法をくつがえした。」(一、一五〇)次に、名指しはないがカエサルを指していることが明らかで、名指しが多くなり、それらによってキケロのカエサル批判の要点を見ることが出来る。キケロによれば、カエサルは、独裁を行い(一、一一)、僭主となった(一、一一二、一一三、一一二八、八三)。彼は、ローマ国家を自分の下に

隷屬させ、ついに国家の亡びに到らせた（三、八三）。彼の施策は、民衆引き回し、農地法案や債務者のための取り計らい、他民族や同盟者に対する態度などにおいて、不当がきわだつ（一、四三、二、二八、八四）。

キケロは、このような批判にもとづき、カエサル殺しは僭主を除去したもので正当であるとして、次のような論旨を展開する。すなわち、人を殺すことは許されない。僭主を殺した場合どうか。ローマではそれは最も立派な行為とされる（三、一九）。僭主を倒すことは、道理に反しない。殺すことさえ徳の高い行為とされる。僭主は世の中から根絶すべきものである（三、三二）。ローマ人民の王になろうとする野望を持った人物の登場は、国を滅ぼすものである。こういう人物の命を奪った人たちは、感謝を受け榮譽を与えられる（三、八三）。

さて状況の深刻さは、カエサルが死去しても、カエサル体制が存続したことにある。キケロがいうには、僭主の死後も国家は彼に従っており（二、二三）、彼の遺産は、財産は少数者に、欲求は多数者に、渡っている（二、二八）。キケロ自身は暴力によって政治や法務の活動を禁じられ、暇をかこつ身である（三、一）。

このような状況の中で、「義務論」は若者への学問の勸

史苑（第五六卷二号）

めとして書かれた。とりわけ法律と弁論を学ぶ意義が説かれる（二、四七、四九、六五―六七）。これは武力の修練とは別のものである。キケロは自作の詩をあらためて引用し、熱弁を振るう（一、七七―七九）。

「武具は平服のあとに付くべきであり、勝利の冠は賞賛の辞のあとに付くべきである」

余人はさておき、われわれが政権を握っていた時、武具は平服のあとに付かなかったであろうか。まさにその時ほど、国家に、重大な危険と、それでいて大きな平静があったことはないのである。そこでわれわれの指導と用心深さのおかげで、武具はたちまち、非道無類の市民の手からすべり落ちてしまった。戦争においてこれほど大きな業績があげられたことがあったろうか。どんな凱旋がこれに比せられるか。（七七）

わが子マルクスよ、私はあなたに誇ってもいいと思う。あなたのなすべきことは、この栄光を受け継ぎ、この行為に倣うことである。……国内での勇敢さは、軍事上のそれに劣るものではない。なおまた前者では、後者においてよりも、いっそう多くの努力と熱意が、注がれてなければならないのである。（七八）

われわれの求める徳の高さは、まったく心による配慮と思考に存する。そこで、平服を着て国政を司る者は、戦い

欲望は理性に従うべし (高橋)

を行う者に劣らぬ利益をもたらす。……したがって、決定を下す理性こそ、決戦にのぞむ勇敢さよりも、求められるべきなのである。(七九)

以上のようにキケロは説いている。その所説を考察して、いくつかのことを指摘したい。

まず、カエサル専制は、その欲求に発するとされる。欲求によって人は政権の獲得と維持を求めてやまず、信義や伝統を顧みず、道を逸脱する。「義務論」におけるこの「欲求」cupiditasと先の「欲望」appetitusとの異同についてここに立ち入るとまはないが、両者は、ややもすれば理性に反する方向に突っ走るといって、共通すると見てよいであろう。とすれば、先の欲望と理性についてのキケロの考えは、ここにおける欲求と理性についてもあてはまるのではなからうか。すなわち彼においては、欲求が危ういのは、人を身勝手な方向に進ませるからであり、この欲求を理性に従わせることが人の義務だということになるのではないか。そしてあえて端的にいえば、ここで欲求もしくは欲望とはカエサル、理性とはキケロ自身のことであろう。「欲望は理性に従うべし」と説くキケロの念頭に、この思いがあったとの推察が可能であろう。

次に、カエサルの殺害は、徳の高さと有利さとの関係と

いう「義務論」の主題の展開の中に位置づけられていることに注目したい。僧主殺しを論ずる箇所(上記、三、一九、八二―八五)で、殺しの行為が、そのもたらす有利さのゆえに是認されるのか、との問いが出される。キケロによれば、そうではなくて、有利さと徳の高さが、ここでは結び付いているのだ、ということになるが、その論調は、やや冴えない。他方、権勢を振るう者については、欲求のおもむくままに権力に到ることは、一見有利に見えても、決して有利ではありえないと論じられている。専制は人びとの反発を招いて、結局は失墜を免れない。高德でないことは、有利であることはない、というのがキケロの主張である。

もう一つ、弁論家キケロの立場について、心にとめたい。当時の有力政治家は、親分子分関係の集積などを通じて、いざとなれば私的な実力を行使する構えをそなえていた。カエサルやポンペイウスは、そのような力の持ち主であった。キケロは、有力政治家の間であって、自分は力ではなく、弁論をたのみとして立ち、苦勞を重ねた。先に引用した彼の詩とそれにつづく言葉には、將軍たちの功業に対し、弁論や法務にたずさわる文民の心意気が表明されている。彼はそこで、弁論や法務が軍事に劣るものではないと、ただ述べるだけではない。この仕事には、軍事などより、いっそう多くの努力と熱意が必要だと言いつつ切っている。この言

葉には重みがある。この軍事と弁論の関係を、キケロは、欲望と理性の關係に相通じるものとして考えていた、と見ることが許されるのではあるまいか。すなわち、彼は、欲望は理性に従うべきであるという時、ただ理性の優位を語るだけではなかったであろう。欲望に対して理性の立場を取る場合は、相手を上回る努力と熱意が欠かせないという覚悟がなくてはならなかったであろう。

キケロの食欲

本学の学生食堂の入口に掲げられたキケロの標語は、場所がら、「食欲は理性に従うべし」と訳されることが多い。訳としてはそれはそれで正しいといえるが、本文の脈絡においては、欲望一般が論じられていることに注意したい。余談になるが、題名から食欲の話を予期されていた方がおられるかもしれないので、いささかそれに言及することにしよう。

「義務論」では、身体を大切にすることは、健康を維持するためであり、快樂のためではない（一、一〇六）という。食欲そのものについては、取り立てて論じられていない。

プルタルコス「キケロ伝」によると、彼は初期の法廷活動のあとでは、やせ細り、胃が弱くて、遅い時間になってから、少食を取ってすませていたという（三）。

史苑（第五六卷二号）

その後も、胃の調子が悪く、大抵遅くなってから食事をしていた。しかし養生に努めて健康を維持し、活動に耐えることができた（八）。

キケロの手紙においても、食べ物や会食への感心は、あまり窺うことはできない。「親しき者への手紙」のある手紙（九、十六、パエトウスあて、四六年、七月）では、キケロは珍しく、昔と違い今は食べ物に関心がある、今度訪ねたらご馳走して欲しいと、書いている。しかしそのあとで、これは冗談だと付け加えられている。

同じ頃、同じ相手に書いた手紙（九、十八）でも、今は食べることに関心が向いていると述べるが、これらは多くの手紙の中の数少ない例に属する。別の手紙（七、二六、ガルスあて、四六年十月―四五年二月）では、先日せいたく禁止令に違反しないような野菜料理をご馳走になったが、美味しくて食べ過ぎ、十日間も腹をこわし、二日間絶食したという。こちらのほうが、キケロらしい。

キケロ自身は、「食欲は理性に従うように」との教えを実行することのできる人であったと思われる。

二 古典としてのキケロの「義務論」

キケロは敗者として死んだが、彼の著作は後世に多くの

欲望は理性に従うべし (高橋)

読者をもった。中でも「義務論」は、最も多く読まれたものである。その一節が、本学の一角に掲げられるに到るまでの長い道のりにおいて、節目となったと思われる所を取り上げて、考察してみたい。

(一) アンブロシウスの「義務論」における欲望と理性

キケロの「義務論」の本文の校訂と翻訳を出したテストアル教授は、その後、アンブロウシスの「義務論」の校訂と翻訳を刊行された。それぞれにおいて、教授はこの二つの著作の関連を指摘しておられる。そこに学びつつ、キケロの「義務論」のその後を追うことにする。

アンブロシウスの生涯と著作

アンブロシウス(三三九―三九七)は、高官への道を歩み、三四七年、はからずもミラノの司教に推挙され、それから信徒になり、キリスト教を学んだ。三八二年、元老院に勝利の祭壇を再建しようとする皇帝への請願に反対し、これを却下させた。三八七年、アウグスティヌスに洗礼を施した。三九〇年、不当な命令を出したテオドシウス帝に対し、悔い改めの表明を指示し、司教の権威を貫いた。

彼は多くの著作をのこした。説教集、神学・倫理論文、手紙のほか、聖歌を書いた。

「義務論」

彼は司教として、聖職者を教え導くことに励み、その教説をキケロの「義務論」を範として著作にまとめた。この著作はしばしば「聖職者の義務について」の名で呼ばれるが、テストアル教授は、アンブロシウス自身の著作の中ではただ「義務論」であること、この著作のすべての写本について系統に分けて表題を調べると「義務論」が本来の名であると推定できること、さらに他の著作家による呼び方や近代の刊行のさいの表題の検討などによって、著作名は「義務論」を採っている。書かれたのは、三八八―三八九年頃である。

この著は三巻から成り、第一巻は徳の高さについて、第二巻は有利さについて、第三巻は徳の高さと有利さとの関係について、論じている。各巻の論述も、キケロの「義務論」の論旨に則って展開される。内容は、キケロの「義務論」と「聖書」を典拠とし、始めはキケロが中心であるが、しだいにキケロと聖書が並列になり、やがて聖書が中心になる。テストアル教授は、このような傾向は、著者アンブロシウス自身の生涯、さらには時代の風潮に対応するものと論じている。

本文

「義務論」第一巻に、欲望と理性を論じた次のような箇所がある。

[1] 一、九八 二つの動きがある。すなわち思考と欲望である。……思考の働きは真実を探求し、研磨することであり、欲望はなにかを行うように人を促し励ます。……そこでわれわれは、善い事の思考が心を占めるように、欲望は理性に従うように、そしてなんらかのことへの愛着が理性を締め出すことのないように、また徳の高さにふさわしいのは何かを理性が思いはかるように、教えられたのである。

[2] 一、一〇五 それでは人生の行為について、どういうものがふさわしいのかを考えてみよう。われわれはこのことについて、顧みるべきこと三つをあげる。第一に、欲望は理性に逆らうべきでない。そうすることによってのみ、われわれの義務はその適正さになうことができる。もしも欲望が理性に従うならば、あらゆる義務において適正さを保つことが容易にできるのである。

[3] 一、一〇六 第一にあたかも万事の根本となるのは、欲望は理性に従うべきであるということである。

[4] 一、二二八 とこころで力は二通りあって、一つは欲望のうち、もう一つは理性のうち存する。理性は欲望

を制して、みずからに従うものにする。そして、理性はその意図する方へ欲望を導き、忠実な教師のように、何をなすべきか、何をなすべきでないかを教え、欲望がその善き調教師に従うようにするのである。

[5] 一、二二九 われわれが心遣いしなければならぬことは、無思慮に投げやりに事をなしてはならないこと、また正当な理由をあげることのできないような事をなしてはならないことである。われわれの行為の原因は、すべての人に与えられることはないが、すべての人によって審査されるのである。われわれはみずから弁解することのできる立場にはない。およそ欲望には、ある本性の力はあるにしても、その欲望はその本性のおきてによって理性に属し、それに従うのである。そこで欲望が理性の前に出たり、それを見限ることのないよう、心がけることが、よい見張りの務めである。欲望が前に出ることによって理性を動揺させたり締め出したることのないように、また見限ることによって理性を放棄したりしてはならないのである。

以上の本文の中で傍線の箇所の原文は次の通りである。

- [1] Ita ergo informati sumus ut bonarum rerum subeat
animum cogitatio, appetitus rationi obtemperet
[2] unum, ut rationi appetitus non reluctentur; ……

欲望は理性に従ふべし (高橋)

si enim appetitus rationi oboediat, facile id quod deceat in omnibus officiis conservari potest.

[3] Sed primum illud quasi fundamentum omnium, ut appetitus rationi pareat.

[4] quae tamen vis gemina est, una in appetitu, altera in ratione posita quae appetitum refrenet et sibi oboedientem praestet……

[5] nam etsi vis quaedam naturae in omni appetitu sit, tamen idem appetitus rationi subiectus est lege naturae ipsius et oboedit ei. unde boni speculatores est ita praetendere animo ut appetitus neque praecurrat rationem neque deserat, ne praecurrando perturbet atque excludat, eam deserendo destituat.

欲望と理性

アンブロシウスは「義務論」において、キケロとほとんど同じ言葉で、キケロとはほとんど同じ話の進め方で、欲望と理性を論じている。その論旨は、前掲の本文を一読すれば明かである。キリスト教倫理の形成にさいして、ギリシャ・ローマ思想が取り入れられたことは、周知である。キケロを拠りどころとした例としては、ラクタンティウスも知ら

れる。しかしアンブロシウスの場合には、キケロとの関係の緊密さは、きわだっている。アンブロシウスはその司教としての功績と学識によって、西欧で尊敬を集めた人であり、彼がキケロ、特にその「義務論」を重んじたことが、キケロの言葉が尊重され、長く生き続けたことに、関わりがあったものと考えられる。彼のあとにアウグスティヌスもキケロから靈感を得た一人であった。

(二) 近代における評価

キケロの「義務論」は西洋人文主義の古典となっている。その伝承の経過などについては、ここでは立ち入らない。近代においてこの著作に高い評価を与えた例としては、まずペトラルカがあり、彼は「義務論」の写本を持ち、尊重していた。エラスムスは、「義務論」を校訂し、その序文に賞賛の言葉を述べている。モンテスキューはみずから「義務論」を構想し、その中間発表を行った。フリードリッヒ二世も、この著作を尊重した人である。

「義務論」には、正義、自由、人間の主張が格調高くうたわれており、これが近代への途上において、人びとに拠りどころを与えたものと考えられる。そしてその主張には、多くの事例があげられていて、きわめて興味深く、また実践に役立つ。さらに、これは若い人、主としてこれか

ら公共の生活に乗り出す若者に向けられており、その教訓には社会の再生への期待が込められている。

但し、他方では、その所説はあまりに当然なことを述べたため、そのまま受け入れるには気が引けるといような反応もあったように思われる。マキアヴェリ「君主論」一八の「君主は狐と獅子のように」は、キケロ「義務論」一、四一から、もじったものだといわれる。キケロは、いつわりは狐の、力ずくは獅子のすることで、非人間的だと述べたのであり、マキアヴェリはそれを踏まえて自説を展開したのである。

三 大学における理性の尊重

この標語と立教大学

一九一八年に立教大学は池袋に移転した。食堂が建ち、寄宿寮が開寮した。当時の状況を伝える資料はいちおう不足してはいないようであるが、この食堂入口の標語については、まだ資料に出会っていない。この標語を選定されたのは、どなたであるのか。どんなお考えをもって選定されたのか。当時の教員表によって、ライフスナイダー総理を始め三四の候補者に見当をつけることはできるが、その先には進まなかった。総理は「神と国とのために」(ラテン

史苑(第五六卷一号)

語)の標語を提唱されたと「立教学院百年史」にあるので、食堂の標語も総理が選定された可能性はある。その選定にはアメリカの大学での経験が元になっていたかもしれないので、このさい、当時の教員と関わりのあるアメリカの各大学にアンケートを出して、大学の食堂にどんな標語が掲げられているかをたずねれば、解決に近づくかもしれない。一九一九年アメリカ伝道局総主事ウッド師が訪問され、食堂前で記念撮影をされたが、その時の食堂入口には、まだ標語は掲げられていない。食堂入口を写した写真を年代順に並べてみれば、いつ標語が掲げられたのが、明かになるかもしれない。

戦時中、横文字が姿を消した時、この標語はどうなっていたのか。確かなことは判らない。現在の銘文は元のものではない。古い字の跡が見え、その上に新しい金属の文字が張り付けてある。それが、いつ、どのように、行われたのか、も調べてみたい。

立教大学の表門から食堂にいたる赤煉瓦の一群の建物は、いわゆるメモリアル・ゾーンをなし、大学の状況を報ずるさいには、必ずその景観が語られる。その一例を紹介する。「朝日新聞」(一九六〇、一〇、一二)の「大学の四季」²に立教大学が載り、「食欲は理性に従う」の題のもとに、第一食堂入口の写真がある。文章は軽妙で読ませる。この

欲望は理性に従うべし (高橋)

標語については、四通りの訳(?)が出てくる。まず、「お腹がすいたら教師にたかれ」は傑作といふべきである。「腹八分は医者いらす」も佳作になる。戦時中の学生は「理性は食欲に従う」と嘆いたという。近ごろの状況を述べたうえで、この記事は、「食欲はサイフに従う」のかもしれない、と結んでいる。

すでに述べたように、この標語の選定の事情は、今はわかっていない。しかしその選定者には感謝と敬意をささげたい。私は最終講義の題を決めるさいに迷うことはなかった。ほかの題目は考えられなかった。これを感謝している。但し考証については今後多くの課題を残したことを残念に思う。

それから、食堂は食事の場であり、食事は日常の生活の最も基本的な営みである。そのような日常的な、基本的な営みの場の入口に、この標語をかかげ、社会倫理の原則、生き方を考えるきっかけを与えようとされた選定者の気構えに敬意を表する。この選定者は、立教の創立者ウィリアムス主教の忠実な弟子であったと云えそうである。師の教えの通り、正に「道を伝えて己を伝えず」を实践されたことになるからである。

大学の課題

大学が理性の府であろうとするのは、当然である。大学における理性の尊重という時、必ず又念頭に浮かぶのは、ヘーゲルがベルリン大学で開講にさいして述べた挨拶の結びの言葉である(一八一八、一〇、二二)。彼は聴衆に、理性への信念、真理への勇氣を持つと呼びかけ、これが哲学を学ぶための第一の条件であると語った。このことは私が高等学校の生徒であった時、天野貞祐校長がいつも必ず話されたことである(天野貞祐「学生に与うる書」二章参照)。「理性への信念、真理への勇氣」、私はこの言葉の格調の高さを印象にとどめたが、それゆえ今でもすぐ念頭に浮かぶのであるが、実際その意味を把握できたものではなかった。それが闘うことの表明であることに思い到らなかつた。

さて二十世紀の末の現在では、欲望や情念に対する理性の優位を云うことは、なんらかの留保なしには、通りにくいものとなってきた。歴史の経過の中で、人間や社会についての見方が、問い返され、改められ、練り直されてきたためである。状況は、理性への信念を持つことをますます困難にする傾向にある。

そんな思いにとらわれる時、キケロの言葉は、語りかける力を持つ。彼は、欲望は理性に従うべきだと力説した。そして彼はただ論じただけではなかつた。彼は、自分を理

性の立場に置き、相手を欲望の立場に置いて、命がけで抗争した。すでに見たように、彼はそのさむ相手を上回る努力と熱意が必要であることを、覚悟していた。理性を語るには、この裏付けを伴わなければならない。

本稿は一九九五年一月一七日におこなわれたいわゆる最終講義の原稿に加筆したものである。

注

- 1 チュヌムトキチ対訳キ M. Testard, Cicéron, les Devoirs, Collection Budé, 1965-70. 〇キキ W. Miller, Cicero, de officiis, Loeb Cl. Libr., 1913. キキ K. Büchner, Cicero, vom rechten Handeln, Sammlung Tusculum, 1987.
訳は、泉井久之助、キタロ、義務のこころ、岩波文庫、1961。
キキ M. T. Griffin and E. M. Atkins, Cicero on Duties, Cambridge Texts in the history of political thought, 1991. キキ。
- 2 チュヌムトキチ D. R. Shackleton Bailey, Cicero: Epistulae ad familiares, 2 vols., Cambridge, 1977.
- 3 チュヌムトキチ対訳キ M. Testard, Saint Ambroise, les Devoirs, Collection Budé, 1984-92.

追記

原稿提出後に入手した本の中から二点について記すことを許していただきたい。その一は、Sarah Spence, Rhetorics of Reason and Desire; Vergil, Augustine, and the Troubadours, Cornell University Press, 1988. 表題は「理性と欲望のインテリク」。この場合の欲望のまじの言葉は cupiditas である。キタロのおごは理性と欲望は上下関係にあるが、副題の三者、とりわけアウグスティヌスにおいては、両者の平衡が顧慮されているとして、その意義を考察している。

キキ Marcus Tullius Ciceroes three books of duties, turned out of latine into english, by Nicolas Grimalde, edited by Gerald O'Gorman, the Renaissance English Text Society, Folger Books, 1990. いわはキタロ「義務論」の十六世紀の英訳本である。拙稿の表題の箇所は次のようになっている。But wee must bring to passe, that our appetites obey reason.